

## 学習と組織をめぐって：越境論を考える

企画・司会：青山征彦（駿河台大学）

話題提供：會津律治（横浜国立大学）・有元典文（横浜国立大学）

香川秀太（大正大学）

岡部大介（東京都市大学）・木村健世（アーティスト）・加藤文俊（慶應義塾大学）

指定討論：長岡健（法政大学）、石田喜美（常磐大学）

### 企画趣旨

青山征彦（駿河台大学）

近年、学習論の領域で注目されている概念として、越境（あるいは境界横断）がある。越境とは、実践のコミュニティの境界を越えて、他のコミュニティの成員と協働することを指す。Engeström, Engeström, & Kärrikkäinen（1995）では、普段とは異なる業務を担当しているチームが協力して課題にあたることによって、熟達とは違う種類の学びが生じると考えた。彼らは、熟達に向かっていく学びを垂直的学習と呼ぶなら、こうした学びは学習者が組織を超えて協働することによって可能になる水平方向の学びであるとして、水平的学習という概念を提唱している。

越境や水平的学習といった考えかたは、認知科学で従来考えられてきた熟達中心の学習観とは大きく異なる。理論的にも興味深いだけでなく、実際的にも、新たな学びの可能性を拓き、実践を変革する可能性を示すものと言える。一方で、実際に越境を通じて学ぶのは、組織によって時間の流れや価値が異なるため、それほど容易なことではないことも指摘されてきている。このワークショップでは、こうした学習者と組織との関係に焦点を当て、越境や、学習（者）のデザインについて論じたい。

### 日常実践の越境による変質 - 学習環境のデザインから見た学校化の具体

會津律治（横浜国立大学大学院）

有元典文（横浜国立大学）

青山(2010)は、実践コミュニティ間の境界は所与ではなく「ローカルな実践によって定義／再定義されることで維持されるもの」と指摘する。実践と境界とは、実践が境界を定め、逆に境界を参照することで実践が規定される関係にあると考えられる。本発表では、境界が実践を既定する例として、ミシンという日常実践の道具が、家庭科授業という学校の境界の中へインポートされることで、これまでとは異なる意味や価値を帯びることを示す。布を縫い合わせるというミシンの日常実践が、学校では各部の名称の空欄補充問題といった記憶課題や、糸のついていないミシン針による針孔跡の評価課題といった実践へと変化した。学校の境界内の実践において、ミシンは知識の獲得・評価を目的として再構成されていた。たとえミシンが得意な子供でも、日常の実践とは異なった学校実践におけるミシンの課題が得意とは限らない。または日常の技能が活かされる場面が構成されとも限らない。学校は日常知と科学的知が出会うことで生起する水平的発達の機会となり得る可能性を持った場だが、境界に強く規定された実践はそうした出会いを阻む。境界を維持する実践によって日常的道具の学習方法や人工物・人へのアクセス方法が変化し、境界横断や水平的発達の機会が失われる事例について議論をしていきたい。

## 越境的な組織改革と複数の異なる主義・アプローチ間の葛藤・混交

香川秀太（大正大学）

近年、一部のリーダーが現場デザインを主導するトップダウン型や、組織間の交流に乏しい分断型のやり方では、変化の激しい現代では対応しづらくなっている。最近、複数の共同体間に水平的な交流があり、最前線にいる複数の人材が現場デザインに取り組む、「越境」的实践が注目されつつある。本発表では、まず、越境的な改革を通して、組織が抱える従来の問題が顕著に改善された、我が国の企業や病院での取り組みを紹介する。また、「越境」や「境界」を、一つの言説実践として捉える「距離化」という視点を提示し、距離化概念から見えてくる、人々の境界生成化実践と境界消失化実践との間の微妙な葛藤を議論していく。その際、現場が複数の主義・アプローチを導入し、ローカライズする中で生じさせている、異なる主義やアプローチ間の矛盾や葛藤について議論したい。通常、特定のあるアプローチに立脚することが多い、学者の実践とは異なり、現場は、複数の主義やアプローチが、元の学派間の境界を越えて移入され、それらの間の「煮え切らない」がしかし「ごった煮」となった、複雑な混交状態で動いている。一見、現場の一貫性のなさを示すこの特徴こそが、しかし現場のリアリティ（堀江・小保方・尾久・香川・山本、2010）であり、この現象を我々がどう捉えるべきか最後に議論していきたい。

## メタファとしての大学を組織する：「墨東大学」という学習の場のデザイン

岡部大介（東京都市大学）

木村健世（アーティスト）

加藤文俊（慶應義塾大学）

「シブヤ大学」や「京都カラスマ大学」などに代表されるように、メタファとして大学のキャンパスをまちにインストールする試みが展開されている。発表者らは、東京都墨田区で開催された「墨東まち見世」というアートイベントのプロジェクトの1つとして、2010年10月から実験的に「墨東大学」という企画を運営してきた。学校教育法で定められた正規の大学とは異なるものの、大学教員、アーティスト、大学生、一般企業に勤務する方々などにより、これまで約50回にわたり、講義や演習という形で「授業」を実施してきた。

まちと深く関連したアートイベントにおいては、プロジェクト間のコラボレーションが期待された。企画会議等の場においても、プロジェクト間の境界を閉じないことが推奨され、これは近年のアートイベントの特徴のひとつであると考えられる。「中心」の形成よりも、「つながり」を促す取り組みや言説が希求され、墨東大学のプロジェクトの意味もまた、その文脈と切り離せない。

本発表では、アートイベントにおけるコラボレーションや越境的な言説がローカルにはどのように生じ、また用いられてきたのかをみていく。墨東大学のような「仕掛け」をまち、または、まちなかアートイベントに埋め込む実践から、人々や組織間の包摂や縫製に関する具体的側面について議論する。